



揺れが止まったその瞬間、火が街を襲う。 — 今こそ考えたい防火対策



二代目横浜駅震災遺構

1923年の関東大震災では、揺れ以上に恐ろしかったのがその後の大火災でした。東京市で22万棟・28万世帯が焼失し、市域の約44%が被害を受け、横浜でも宅地の75%が焼失しました。強風や風向きの急変、木造住宅の密集、断水や道路寸断による消防活動の遅れが被害を拡大させました。

本所区被服廠跡では**火災旋風**※が発生し、約3万8千人が犠牲となっています。

※局地的に強い風を吹かせる炎を伴った旋風（つむじ風）。大規模火災時に発生することがある。



希望の灯り

また、阪神淡路大震災(1995年)でも7千棟以上が焼失し、消火水不足や交通渋滞が深刻な問題となりました。

つまり「消防力だけに頼るのでは不十分」なのです。都市全体の不燃化や空地の確保が必要であると同時に、**私たち一人ひとりの備えも欠かせません。**



焼失した輪島朝市

さらに、記憶に新しい能登半島地震（2024年）では、石川県輪島市の朝市で大規模火災が発生しました。木造建築が密集するエリアで延焼が広がり、約200棟が焼失しました。道路の寸断や消火水不足が重なり、消防活動が難航した点は、102年前の関東大震災と驚くほど共通しています。

個人でできる火災対策

✓ **初期消火の備え**：消火器を設置し、**使い方を確認**する。



✓ **出火防止**：家具や電気機器の転倒防止で火災リスクを減らす。
一定以上揺れた際に自動で電源を遮断する**感震ブレーカー**が有効。
配電盤に組み込まれたものや、後付けタイプもあります。



✓ **避難準備**：避難経路や避難所を**家族と共有**しておく。

地震火災は過去の出来事ではなく、今も現実的な脅威です。
小さな意識と備えが、大切な命を守ります。

**過去の震災が残した教訓を、未来へ引き継げるのは
今を生きる私たち。今すぐ備えましょう！**